



図書館通信

学ぶことをやめた者は老人である。20歳であろうと80歳であろうと。学び続ける者はいつまでも若い。人生で大切なことは、心の若さを保つことだ。

ヘンリー・フォード (フォード・モーター創設者)



明るい日差しと共に、あらゆるものが目覚め、清新の気があふれる季節です。学舎にも、新しいスタートへの期待・意欲に満ちた学生で溢れ、まぶしいばかり。附属図書館に行けば、必ず何かを得られる！そのように利用者の皆様のお役に立つことができる図書館を目指し、館員一同気持ち新たに新年度をスタートします。質問、相談等お気軽に附属図書館員にお声掛けください。ご利用お待ちしております。

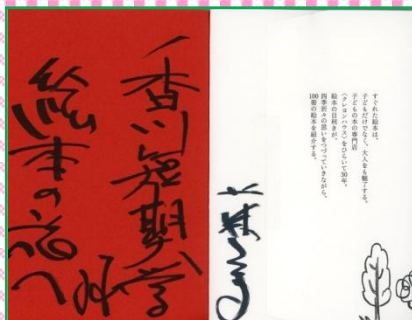
作家 落合恵子氏メッセージ



2017年2月11日、宇多津町と香川短期大学などで組織する「若者が集う文化のまちうたづ実行委員会」(会長・石川浩香川短期大学学長)が主催で、「第10回平成相聞歌授賞式」が開催されました。同時に作家の落合恵子氏の記念講演会も開催され、記念に香川短期大学附属図書館利用者へメッセージを書いていただきました。落合氏は、食・育児・介護・社会問題と幅広く執筆をされており、附属図書館にも落合氏の様々な分野の図書を蔵書しています。

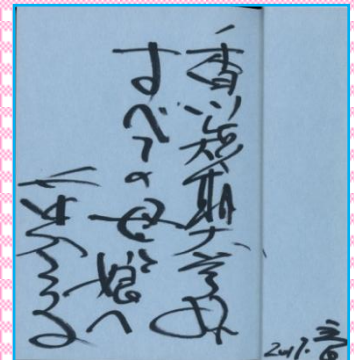
『絵本屋の日曜日』

落合恵子 著 岩波書店
請求記号 019.53/OC



『母に歌う子守唄』

落合恵子 著 朝日新聞出版
請求記号 916/OC



～開館時間のお知らせ～
月～金 9:00～17:00

臨時に休館する場合は、その都度掲示でお知らせいたします。

寄稿文



「図書館」

私は小さいときから本に囲まれて育ってきた。最近では所謂、専門書を読む時間しかないが、外出先でもふらっと立ち寄りたくなるのが書店である。書店は忽ち自分の必要とする専門書のほかにも小説、エッセイ、旅行ガイド、料理の本、絵本などがあり、自分自身の全ての興味・関心・気持ちに応じてくれる。じっくりと本棚を眺めながら、買うか買わないかを吟味する。購入するポイントは、「再び読み返したいと思うか」である。自宅の狭い本棚に入るための競争率は高いのである。そこで図書館の出番である。本に囲まれて育ってきた私でさえも、本を短い時間、限られた資金で本を選ぶことは難しい。その点、図書館はたくさんの本がある。一度に借りることができる冊数、期限は決まっているが、無料なのである（当たり前だけど大事なことである）。図書館には読んでみたい本を自由に手に取ることができるうえ、買うことができなかつた本も借りて読むことができ、面白くないと思えば返せばいいだけの話である。興味本位で借りた本に夢中になり、自分の新たな扉が開くのである。

そこで私なりに考える図書に触れる良さを紹介したい。思い返せば、ヘレンケラーのサリバン先生が大好きだった。結局のところいろんな本や伝記を読んでもこれが一番面白いと思えたのを担任（だったように思う）に話したことが進路決定につながった。わが子はテニスをしているときには「テニスの王子様」、サッカーを始めると小野伸二の自伝をバイブルのように読み、行動のモチベーションを挙げていた。インターネットやテレビなどは動機となることが多いが、なりたいもの、やりたいものを手元に置きときどき初心に戻してくれるものが本である。私は本以外に旅行が好きである。1回の旅行に本を買うなんてと思うときには、図書館にある旅行ガイドを借りて旅行先での食事、観光先を吟味するのである。どの本を借りようか迷ったらいくつかの旅行ガイドを借りて気に入ったものを購入することもあれば、借りた本で旅行して再び訪れたいときには書店で購入することもある。これも図書館利用の醍醐味である。

学生との関わりから振りかえれば、本は新たな情報、気づきをもたらす。最近では福祉問題を扱った本も多く、図書館を利用することも多い。児童養護施設、低所得の問題、家族介護についての本などもあり、学生は今まで知らなかった福祉の情報を本から得ている。ニュースを見る機会が少なく、自分の興味を深めるインターネットの利用の多い学生にとって、本はじっくり読んで振り返り考えることができる貴重な教材である。一昨年の夏、学生の一言から私は村上春樹にはまってしまった。勝手に苦手だと思っていたので、購入には躊躇してしまった。そんな時は図書館の出番である。借りて読んでみると面白くて、あっという間にハルキスト、ノーベル文学賞が毎年気になるようになってしまった。こんなに単純な例は参考にならないかもしれないが、本は自分の知らない自分を気づかせてくれるのである。

図書館を大いに利用しよう。学生にとって図書館は、無料で本を貸してくれる、勉強する場を提供してくれる強い味方である。その上、進路選択、専門的な学び、モチベーションを挙げてくれる上、気分転換のための材料も豊富である。図書館には利用促進のため、専門書だけでなく、小説や絵本、伝記なども購入していただき、多くの人が本に触れることができるように取り組んでもらいたい。

柚木麻子



『3時のアッコちゃん』
柚木麻子 著
双葉社
913.6/YU

『3時のアッコちゃん』

生活文化学科
食物栄養専攻
平成28年度卒業生
大浦 亜日香

物語の中においしい食べ物が出てくると、よくキッチンに立って同じものを作り始める。若草物語に出てくるブラマンジェや、ハウルの動く城のベーコンエッグ、大掃除で昔の教科書を引っ張り出してきた時はサラダでげんきのサラダを作った。なんてことない普通のごはんなのに、物語に思いをはせながら食べると、自分が主人公にでもなったような勇気や優しさが自然と胸から滲み出てくるのだ。

私事だが、四月から社会人になる。自分のお金で自由にできる楽しみがある反面、これから経験するであろう世間の荒波を想像すると、背筋がうすら寒くなってくる。

そんな時、私の背筋をぱんっと叩いて「しっかりしなさい！」と叱咤激励してくれるのが『3時のアッコちゃん』という本である。この物語の中に出てくるアッコちゃんこと黒川敦子さんは、仕事で様々な悩みを抱える女性社員たちの前に現れ、無茶な要求に、お説教とアドバイス、そうして必ず美味しい食べ物を用意してくれる。それだけではなく自身もワゴン車ひとつで企業を展開する非常にバイタリティに溢れた人だ。突出した行動力と柔軟な考え方で、凝り固まって疲れてしまった私たちの価値観を時に厳しく、しかし愛情を持って揉み解してくれる。

例えば、仕事を始めれば、上司にお茶を淹れたりお菓子を出したりする機会もあるだろう。急須に茶葉とお湯を注いで、湯飲みに注いで上司に出す。なんてことない、まるで価値なんてないような行動だが、アッコさんに言わせるとスケールがまるで変わってくる。曰く、干利休は権力者にお茶を振る舞うことで権力者より優位に立ち、政治を操ることができた。だから秀吉に殺されたのだ。お茶を出すということは場の主導権を握ることである。ただの給仕の仕事のはずなのに、なんだか権力を狙う策士にでもなったかのような言い様である。しかし、確かに上司にお茶を出す時というのは、比較的上司とコミュニケーションが取りやすい環境のように思える。ただの雑用係でも考え方次第でやる気が断然違ってくる。ひとつひとつの仕事に意味があるのだと実感させてくれる。お茶をおいしく淹れるコツを、今のうちに勉強しておいた方がいいかもしれない。

3時のアッコちゃんでは、クリスマスプディングやスコーン、スムージー等様々な食べ物が登場する。良い仕事がしたいなら、『食べること、休むこと、しゃべること』を大切にしなさいと働き詰めの登場人物たちに諭すのだ。アッコさんはブラック企業で働く女性に対して「他人のものさしにしたがってしちゃだめ。自分のものさしで判断したらきっと今より楽になれる」という言葉をかける。雇用が不安定な現代では、誰もが仕事に対して不安を抱いている。狭き正社員という道のために、自分の価値を他人のものさしに委ねてしまうことも多いのではないだろうか。

こんな世の中だからこそ、私たちは自分の価値をしっかりと自分で見極めていかなければならない。アッコさんのような強かさを持ち、何よりも自分を大切に、時には人の手助けをしながら、自分の信じた道をしっかり歩いていきたいと思った。

編集後記

お忙しい中、今号にご寄稿くださった岡崎先生、大浦さんありがとうございました。本学附属図書館は卒業後も一般利用者としてご利用いただけます。今後どうぞご利用ください。ご来館お待ちしております。(F)